

悪い者に手向かってはいけません。——悪にどう向かうか？

2014年2月 日本新教会 牧師 松本土郎

『目には目で、歯には歯で。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。

しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。(マタイ5:38-39)

スウェーデンボリが、霊界での体験を語った記述の中で、本人が意識しないうちに、自分の思いつきを吹き込み、本人の思い付きであるかのように欺き、心地よい状態にさせた悪霊がいました。しかし、それは悪霊たちの仕業であることを気づかされ、その悪霊たちに「反発し、闘い、相手のほうに押し返し、・・・それを自からの力で行うように行いました。すると、別の霊が、『悪に悪をもって抗うことは許されていない』と、私に語ります。その霊たちは、ただ耐え忍び、主から直接の助けを待つべきだと考えていました。そう考えたのは、悪に反発せず、もたらされるあらゆる悪に耐えて、主からの直接の救いを待て、(マタイ5:39) という字義から生まれた解釈でした」(霊界体験記2889)。

しかし、スウェーデンボリは教えられます「そのように解釈すべきではありません。もし人が人間の生命において、盗人や強盗や犯罪者が、誰かの生命を奪い、あるいはその人のもっとも大切なものや必要なものを、巧みにあるいは力づくで盗み、燃やされても、人はただこれを受け入れ、主からの直接の助けを待ち、助けを得なければ、主に責めを帰す、というのは、誤った解釈です(霊界体験記2890)」。

私たちは、自分の中の悪だけではなく、外の悪とも日々接しています。人だけではなく、家族や社会、そして国も同じです。悪との接触を、三つの類型で考えてみます。悪から害を受けるとき、他人の悪を見るとき、そして自分の悪。他にも可能性はあるかもしれませんが、この三つの類型で、どう悪と接すべきか、みことばに学び、考えてみましょう。

まず、本日の朗読にある、マタイ福音書の「悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。(マタイ5:39)」以下に語られている教えが、何を語っているのか、天界の教えに尋ねます。

レビ記24:17-21に定められた「目には目。歯には歯」という、報復の法と呼ばれる法則は、黄金則「何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。(マタイ 7:12)」の裏返しであり、「人に傷を負わせたように、人は自分もそうされなければなりません」。この法則によれば、悪を行うと、悪自体に罰がぴったりとくっついてきます。

この世では悪がはびこり、人にわからなければ、あるいは権力さえあれば、悪は自由に許されているように見えます。しかし、実はこれは主のさらに深い目的のために許されているだけです。人の悪は、奥深くに隠れていて、表に「現れなければ、悪は取り去ることができません(神の摂理278)」。人の悪は、深く人の内側に根を張って、いわば、その悪を人が知らないうちに、悪を溺愛し、自分の生命としてい

ます。そのため、悪を「主の直接の慈悲」によって取り除くことは、その人間の死を意味します。周到に用意をし、本人に気付かせ、納得づくでなければ、悪は取り除けません。そのため、悪が行なわれ、表に現れることは、主によって許されています。あくまで「救済という最終目的のために、（神の摂理281）」悪が許されています。

この世においては、一見そうでないように見えますが、「悪は自ら罰を背負っている」のは普遍的な法則であり、来世に行けば非常に鮮明に現れます。この世では、悪い方向であれ、善い方向であれ、人の愛を育てるため、人は善と悪が均衡している調和の中に置かれ、自由にその愛を育ててゆきます。しかし、来世になれば、当人の愛は固まりつつあるので、悪人はこの世にいたとき以上に悪を行わせないように、罰で抑制されます。その悪を抑制するのは、主ではなく、天使でもなく、同じ地獄にいる仲間によって行われます。悪が行われれば、その悪人に、他の無数の地獄の悪人が、害を与えようと群がってきます。そうすることで、この世にいたとき以上の悪を行わないよう、主はこの法則を制定し継続して守られることで、地獄を統治されておられます。

「悪は自ら罰を背負っている」ため、主は「悪に反発しなくてもいい」とおしゃっています（天界の秘義9049-4）。しかし、もし、外からの悪の害の対象とされる者本人が、悪意や、悪を行う人への憎しみや嫌悪、復讐心を抱くようになると、話は変わってきます。被害者の中に悪意が生まれれば、主は善をお守りになっても、悪を守ることは、主の自らお創りになった秩序に反するため、その守りは解かれ、たちまち「目には目。歯には歯」が働き、自分が抱いた悪にむかって、罰が働きはじめます（黙示録解説556-8参照）。

天界の教えは、さらに右の頬・左の頬、下着と上着、一ミリオン・二ミリオンのたとえの内意を解き明かしてくれます。

「同時に、霊界で善によって治められている者たちに、悪に対して治められている者との関係をどうするか、この法によって意味されており、それを主が説明されています。（天界の秘義9049-4）」霊界での法則であり、そのまま現世において100%は適用されていないことに注意してください。この世では、均衡の自由の中にその人間の愛を育てるという別の目的もあるからです。

黙示録解説556-9には、以下の内意が説明されています。

顔の個々の部分は、真理の認識や理解に相応しており、「右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。」とは、右の頬である「内的真理への情愛そしてそこからくる認識」に誰かが害を与えようとするなら、左の頬である「内的真理の理解」へ害を与えることも許されることが言われています。なぜなら彼らは、主に守られていて、決して害されることはないからです。

「告訴して下着を取ろうとする者には、上着もやりなさい。」

「ここで下着は内的真理を意味し、上着は外的な真理を意味し」、内的な真理を取り上げようとする者に、外的な真理も取り上げることが許されます。しかし、悪は天使から善と真理を奪うことはできません、主が天使たちをお守りになっているからです。けれども、先に述べたように、もし彼が敵意と嫌悪

と復讐心に燃えている者であれば、それを奪うことができます。なぜならこれらの悪は、主の守りをそむけ、はねつけてしまうからです。

「一ミリオン行けと強いるような者とは、いっしょに二ミリオン行きなさい。」
真理から偽りへ、善から悪へ誘惑しようとする望んでも、主に守られていて、そうすることはできないのでその道行を止める必要はありません。

「求める者には与え、借りようとする者は断わらないようにしなさい。」
悪は真理を捻じ曲げ、取り去ろうとするためにそれを（教わろうと）望みます。しかしこれも守られて捻じ曲げられることも取り去ろうとすることもできないので、教わりたいと望むなら、教わるすることができます。

以上、主の守りが天使と、さらにこの世の善い人々には常に及んでいて、悪は何事もできないことが記されています。悪が内的真理の理解を害そう、内的真理を取り上げよう、偽りから悪、善から悪へ捻じ曲げようとしても、それは、主によって守られているので、その悪は妨げられません。

主は、悪から、善にいて決して悪に傾かない者、そして天使たちを、常にお守りなり、その不変・不断の守りを知らせることで、善にいる者たちは、深い平安に落ち着くことができます。自己の力に頼らず、すべてを主に委ね、誰に対しても、それがたとえ悪にいる者たちであっても、敵意ではなく、暖かい気持ちを向けることができます。

また、悪にいる者、地獄にいる者は、善と真理に対して、どんなに力を尽くそうとも、自分たちは何もできないことを、いやというほど知ることになります。そしてその行為には罰が待っていて、悪は地獄自体の力で抑制され、自分たちの意図とは違いますが役立ちの中にいます。
これら霊界の法則によって得られる効果は、実はこのように奥深いものです。

次に、他人の悪には、どう対処すればいいでしょうか。

「なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。兄弟に向かって、『あなたの目のちりを取らせてください。』などとどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか。偽善者たち。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。」（マタイ7:3-5）「ちり」は、相手の真理の理解の誤りを意味し（天界の秘義9051-3）、「梁」は悪の大きな偽りを意味します（黙示録解説746:16）。すると、人の誤りを正す前に、まず自分の悪の偽りを、見つけ、取り除かねばならないことが明らかです。

最後に、一番の問題、自分にある悪です。もし自分のうちに全くなければ、外の悪は自分を害することができず、他人の悪も正すという仁愛の業を行うことができます。自分にある悪、これと戦う力はどうすれば得られるのでしょうか？

「悪に反発する力は、人から来ておらず、主を認める人に、主から来ており、主はまるで人が自らやっ

ているような外観を与られます」（黙示録解説1165）。そしてそれは、「主のみのお力で行われており、天界のどの天使を通しても行われません。なぜなら人が悪に反発する力は、主の全能・全知・摂理の働きであるからです」（黙示録解説1166）。

悪に反発するとは、全地獄と戦うことであり、その力は強大で、主の全能を持ってする以外にどんな天使にも不可能です。

さらに、「人は生まれたときから地獄の社会のただ中にいる」（黙示録解説1163）るので、人が悪に反発することは、自分自身の生命と戦うことに他なりません。これは、本人には不可能なことです。その人の本当の性質を知る主の全知と、これを長い間かけて、悪から導き出す深い主の知恵、摂理がなければ、不可能です。

主は本来、善と真理を受ける器でしかない人間に、永遠の生命を与えるために、人が自分自身から生きているような外観を与え続けておられます。本当は自分からは何も考えることができず、意志もない「器」が、自分が意志を持ち、考えているという外観を与えていなければなりません。そのため人の側にも、主体的に善悪のどちらかを選ぶという努力が必要です。

「地獄から導き出され、主によって天界に入るためには、自分自身から悪にたち向かわなければなりません」（黙示録解説1164）。悪を厭い、避けようとする本人の努力がないなら、悪のままに染まってしまうか、何も選択せず、行動しない屍となってしまいます。

「人は悪を罪として避け、自ら悪と戦わねばならない。自由の中に理性に照らして行うことは、神の秩序にかなっています。なぜなら自由の中に理性に照らして行うことは、自ら行うことであるからです。」

（生の教え101）

悪、地獄の側でいえば、彼らは善を憎み、絶えず破壊しようとしています。それが彼らの喜びであり、生命であるからです。それを完全に抑制すれば、悪と地獄は、すべての快樂を奪われて生命のない状態に陥ります。

一方、天界の天使は、善と真理のすべてが、主から来ていて、自分からはひとかけらもきていない、自分は善と真理を受ける器にしか過ぎない。これを知り、いつも心から納得していなければ天界にいることはできません。自分に善と真理が全くないことを知れば知るほど、その天使は主とより深く結ばれて、より幸福を味わうようになります。

主は、天界と地獄に、それぞれの愛に合致した幸福・生きがいを与られています。善と真理を常に増やし続け、悪と偽りは、その悪の喜びがすべて滅んで、地獄の生きがいを奪ってしまわないよう、他の悪に罰を与えるという役立ちを与られます。そうすることで善と真理にいる者を守り、残念ながら悪に生きざるをえない者には、この世に生きてるときよりも、状態が悪化しないよう罰を与えることで抑制されます。いつもいかなるときも、すべてがなんらかの善を産み出し、少しでも周りの何かの役に立つよう、絶妙のバランスでコントロールされています。そして、そのコントロールは、全宇宙の隅々にまでおよび、ほんの一瞬も休まれることはありません。たったおひとりで、ほんの須臾（しゅゆ）の間から永遠に至るまで、全宇宙のすべてを処理されています。

悪を、主の望まれる秩序に反する罪として、厭い避けること。これが、主が私たちにお望みになっている第一のことです。この第一ができるなら、主が私たちを通して善を行う業が、私たちの悪によって妨害されなくなります。すると人は主の深い絶え間ない働きの英知とその秩序の法である摂理によって、他人への役立ちを学び、隣人への役立ちの歓びを知り、悪は遠ざけられ、次第に改良され、最終的には再生されることとなります。

「少しの悪なら許される」といった思いが湧き上がることがあります。しかしこれは、悪を受け入れることになりません。悪はたとえ小さくても、主に対する罪として、徹底的に厭い、避けなければなりません。善と悪、すなわち人に善かれという思いと、人を害しようという思いは、根本から対立していて、悪の大小は関係ないからです。

小さな悪、少しの偽りを拒否して、主を見上げて、主の見方から善と悪を見て、悪を避けること、これが絶えずお働きになっている主へ協力する第一のことです。どんな小さなことであっても懸命に行うのが、主の絶え間ない神的な働きに対する、わたくしたちのわずかな感謝のしるしです。

「だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。」（マタイ5:48）アーメン

レビ記24:18-21

動物を打ち殺す者は、いのちにはいのちをもって償わなければならない。

もし人がその隣人に傷を負わせるなら、その人は自分がしたと同じようにされなければならない。

骨折には骨折。目には目。歯には歯。人に傷を負わせたように人は自分もそうされなければならない。

動物を打ち殺す者は償いをしなければならず、人を打ち殺す者は殺されなければならない。

マタイ 5:39-45, 48

『目には目で、歯には歯で。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。

しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。

あなたを告訴して下着を取ろうとする者には、上着もやりなさい。

あなたに一ミリオン行けと強いるような者とは、いっしょに二ミリオン行きなさい。

求める者には与え、借りようとする者は断わらないようにしなさい。

『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。

しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。

それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです

・ ・ だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。

天界の秘義 8223 [2] しかし、来世での法の状況は、加えて、こんな風です。報復的、あるいはそれに似た行為が悪なら、それは悪によって与えられており、決して善によって与えられてはいません。すなわち、それは地獄から来ており、決して天からは来ていません。なぜなら、地獄、あるいはそこにいる悪い者たちは、絶えず他人に悪を行おうと欲しており、これが彼らの生命の喜びそのものであるため、それが許されるやいなや、悪を行います。対象が誰であれ、対象が悪い者か善い者であるかどうか、仲間であるか敵であるかは全く関係ありません。それは悪を意図した者には悪が返ってくるという秩序の法からきているので、法によって許されるやいなや、彼らは群がってきます。これは地獄にいる悪人によってなされ、天界にいる善人によってはなされません、なぜなら後者は、他人に善いことをしたいと絶えず望んでいて、それが彼らの生命の喜びであるからです。そのため機会があるなら、たちまち彼らは善を行います、それがたとえ敵であれ、味方であれ、いや彼らは、正確には、悪に反応しません、なぜなら、秩序の法は、善と真理を守り、保護するからです。

これが以下で主がおっしゃったことです。

『目には目で、歯には歯で。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。

しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に反応してはいけません。・ ・

『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。

しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、あなたのことを悪く言う者のことを善く語り、嫌っている者たちによくしてあげなさい。

それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。

(マタイ 5:38, 39, 43-45).